

研修医通信 vol.92 2018/10



東京大学医学部附属病院初期研修医2年の小池穂子です。

1ヶ月間、野村先生ご指導のもと、内科研修でお世話になりました。

青い海を眺めながら、年中みかんのなるこの阿田和での生活は、とても楽しく充実したものでした。

この一ヶ月間で多くのことを経験しましたが、まずはやはり、近隣に医療機関がない状況での救急外来です。東京では病院が近くにたくさんあるため、たとえば救急車から電話がきても、今最適な医療を施せないと判断した場合には、救急車や患者さんに違う病院へ行ってもらおうという選択肢もあります。しかし紀南病院では一番近い病院まで救急車で30分かかるため、来た患者さんは全員みなければなりません。このような環境での救急外来を経験できたことは非常に貴重な経験でした。

救急外来では、短い間にたくさんの経験を積ませていただきました。特に、検査、診断、治療後に、その患者さんの入院・帰宅の判断を自分でして指導医に最終許可をとる、という経験をさせて頂きましたが、いざ自分で判断するとなると、とても悩んだことを覚えています。病棟ではターミナル患者さんご家族へのお話を私が主体と



なってさせて頂く機会も与えて頂き、とても貴重な経験となりました。また、中心静脈カテーテル挿入や腹水穿刺など、院内で様々な手技のあるたびに呼んで頂いて、一ヶ月の間にとても沢山の手技をさせて頂きました。

診療所にも2カ所行かせて頂きました。

まずは濱口先生のいらっしゃる紀和診療所です。ここでは振動病の労災の方の定期フォローがあり、この地が鉱山の街だったという歴史を、医療を通じても感じることができました。



また、神島診療所にも行かせて頂きました。

三島由紀夫の潮騒という小説の舞台となった島で、一周歩いて2時間、人口350人の島です。高齢化は50%超過疎化が進んでいるとのことでした。この島では小泉先生という全国の診療所を回られてきた先生が診療されていました。「島全員のかかりつけ医」とあるという状況を

実感し、大変なことであると思いました。楽しそうに島での診療を語ってくださった小泉先生からは、職業というよりも生活の一部としての医師であるように感じました。また舗装道路がないため、車はもちろんなく、石畳の坂でできているこの島は、元気で自分で歩ける人しか暮らせず、高齢になると本島に移住する人も多いという実情も伺いました。

また、7割が小久保さんという名字であることに私は驚きました。

たくさんの観光も出来ました。熊野三山巡りをして、朱印帳デビューをしたり、丸山千枚田へ行き、その雄大な景色に圧倒されました。鉱山資料館やトロッコに一人で乗って、湯ノ口温泉まで行ったのも良い思い出です。



先生方、看護部長さんに飲みにも連れて行って頂き、本当に良くして頂いて、最初は心細かった研修が、とても充実して楽しいあつという間の一ヶ月間となりました。

あたたかく迎えてくださり、本当にありがとうございました。